Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka 2015-09-02

APM news 135

秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館（旧北越銀行宮内支店）

〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8
TEL 0258-39-1233

第29回美術館大学　7月11日(土)pm3:00～pm4:30／受講者：44名

「秋山孝の神秘『メタファー』について」1

講師：秋山孝、たかだみつみ

秋山孝ポスター美術館長岡（APM）の開館当初から定期的に開催してきた「秋山孝ポスター展」。7回目を迎える今回から「秋山孝の神秘」という展示名がついた。これは、秋山孝（多摩美術大学教授・APM館長）のポスター作品表現の秘密を解き明かすことを目的としたシリーズ企画であり、今後定期的に開催していく予定だ。毎回テーマを設け、秋山孝の秘密のひとつひとつを研究していく。第1回目のテーマは「メタファー」である。秋山の表現において、とても重要な要素である。展示初日に開催した第29回美術館大学では、たかだみつみ（APM学芸員）の進行のもと、秋山本人が「メタファー」について語った。

そもそも「メタファー」とは何なのか。

主に言語分野で使われる修辞技法のひとつである。日本語では「暗喩」「隠喩」と訳され、直接的な表現ではなく、わからないように指し示したり意味を持たせたりする、比喩表現の一種である。「メタファー」の歴史は古く、古代ギリシャ時代にまで遡る。ソクラテスやプラトンをはじめとする多くの哲学者が「メタファー」を研究をしてきたが、未だに結論が出ていない。

イラストレーション（視覚分野）での「メタファー」表現を試みている秋山であるが、言語における「メタファー」の研究も長年行なっている。それが、「言葉のスケッチ」というシリーズである。20代から43年間継続して行なっている研究で、日々、心に浮かんだ言葉を書き留めている。秋山は「言葉のスケッチ」や松尾芭蕉の俳句の幾つかを例に上げて、言語分野における「メタファー」を説明した。短い一文の中に読み手は想像を広げ、言葉の向こう側に広がる世界を感じ取るのだ。そこにいかに想像の広がりや、共感を生み出すかが、優れた「メタファー」といえるのではないだろうか。

いよいよ話題は、秋山にとって最大なる難問である、視覚分野における「メタファー」についてとなる。表現において最も重要なキーワードは「言わない」「描かない」であると秋山は語る。

今回の企画展ポスターを例に挙げてみる。中心には犬らしき形が描いてある。秋山の愛犬ゴマを描いているのだが、目や口をはっきりとは描かずにあくまで「犬らしきもの」でとどめている。その口もとらしき部分からは展示の基本情報が発せられているようだ。実際のゴマが話す事は無いが、このポスターでは秋山の代わりに情報を発している。正に「声なき声」である。背景はオレンジとグリーンの色面で分割されている。色面の分割位置や色の印象から、グリーンの色面を芝生と想像する人もいるだろう。オレンジの色面を夕焼けの色だと想像する人もいるだろう。もしくは、明るい空間と捉える人もいるだろう。観る人によって解釈が変わる。それが「メタファー」なのである。

今回の企画展の展示作品は御法川哲郎（長岡造形大学准教授・APM事務局長）が選出した。御法川は、秋山のポスター作品を見返しながら、直接的な比喩ではなく他の物で置き換えて表現することによって、イメージに広がりが出るということを感じたという。【▶次号へつづく】（たかだみつみ・APM学芸員／公式ホームページより抜粋）